

大林道路

生産能力を倍増

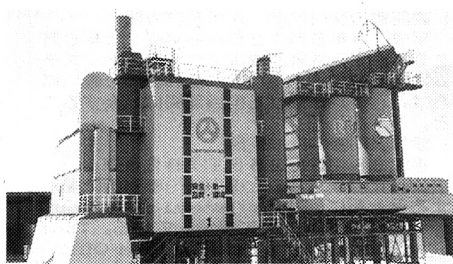
大分アスファルト混合所

大林道路が大分市片島米良山への移転新築工事を進めていた大分アスファルト混合所が竣工し、10日に現地で火入

れ式を開いた。生産能力は旧工場の2倍に増強、最新鋭の設備を備えた都市型プラントとなり、地域発展に貢献する。式典には関係者73人が出席し、施設完成を祝った。火入れの儀では、大林道路の長谷川仁社長、濱田道博取締役専務執行役員、岩尾敬司執行役員九州支店長、前田裕行大分アスファルト混合所長、施工

を担当した長幸建設の長野勝行社長、地元の糸永隆章米良下自治会長が点火スイッチを押しした。

老朽化やサービス向上を目的に大分市久土から移転新築した。新工場の合材プラントの生産能力は1時間当たり120ト。合材サイロは100ト、120トを1基ずつ備える。リサイクルプラントは破



竣工した大分アスファルト混合所

砕能力が1時間当たり100ト、保管能力約4000立方メートル、再生製品保管能力約2000立方メートルとなっている。

新工場は脱臭装置の設置やガス燃料の導入、騒音対策として高さ8メートルの外壁を設置した。また、太陽光発電装置の設置、機械設備や合材積載トラックの付着防止に植物性油脂を使うなど環境に配慮している。大分スポーツ公園に面することから、外周の緑化な



火入れの儀（左から4人目が長谷川社長）

ど景観面にも力を入れた。大分自動車道・東九州自動車道の片島米良IC（インターチェンジ）まで2キロの立地で、通常工事だけでなく、災害復旧でも迅速に対応する。舗装材料の販売は1時間から1時間半の輸送圏内を目標としている。

式の後、あいさつした長谷川社長は「この地で最大限の活動を続け、皆さんの期待に応えられるよう安全第一はもとより、高い品質を確保すべく全力で取り組む」と話した。祝辞を述べた大分県アスファルト合材協会の友岡誠一会長は「南海トラフによる巨大地震の被災が懸念される大分にあつて、このような大規模な工場があることは県民の1つの安心になる」と期待を寄せた。